



ラザリのスボタ

晩禱
聖体礼儀

2016 OSAKA

聖にして義なる、ラザリのスポタ 早課

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

誦経 「アミン」

来れ、我等の王・神に叩拝せん。

来れ、ハリストス我等の王・神に叩拝俯伏せん。

来れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拝俯伏せん。

誦経 第 19 聖詠

願くは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛らん。願くは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。願くは爾が悉くの獻物を記憶し、爾の燔祭を肥えたる物とせん。願くは主は爾の心に循ひて爾に與へ、爾の謀る所を悉く遂げしめん。我等は爾の救を喜び、我が神の名に依りて旌を揚げん。願くは主は爾が悉くの願を成就せしめん。今我主が其膏つけられし者を救ふを知れり、彼は聖天より其救の右の手の力を以て之に對ふ。或は車を以て、或は馬を以て誇る者あり、唯我等は主我が神の名を以て誇る、彼等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給へ。

第 20 聖詠

主よ、王は爾の力を樂み、爾の救を歡ぶこと極なし。其心に望む所は、爾之を與へ、其口に求める所は、爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福を以て彼をむかへ、純金の冠を其首に冠らせたり。彼生命を爾に求めしに、爾之に世世の壽を賜へり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴とを之に被らせたり。爾は彼に祝福を世世に賜ひ、爾が顔の歡にて彼を樂ませたり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉くの敵を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ね出さん。爾怒る時彼等を火爐の如くなさん、主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を齧まん。爾は彼等の果を地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向ひて惡事を企て、謀を設けたれども、之を遂ぐる能はざりき。爾彼等を立てて的となし、爾の弓を以て矢を其面に發たん。主よ爾の力を以て自ら舉れ、我等は爾の權能を歌頌讚榮せん。

誦経 光榮は父と子と聖神^oに歸す、今も何時も世世に、「アミン」

誦経 【聖三祝文】【至聖三者】【天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神^oに歸す、今も何時も世世に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神^oに歸す、今も何時も世世に、「アミン」

天に在す我等の父よ、願くは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地

にも行はれん、我が日用の糧^{かて}を今日^{こんにち}我等^{あた}に與へ給へ、我等^{おいめ}に債^{おひめ}ある者を我等^{ゆる}免すが如く、我等^{おいめ}の債^{おひめ}を免^{ゆる}し給へ、我等^{いざない}を誘^{いざない}に導かず、猶^{なお}我等^{なお}を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神^〇に帰す、今も何時^{いつ}も世世に、
誦経 「アミン」

誦経 【トロバリ】

主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、吾が国に^{さいわい}福^{さいわい}を与へ、爾の十字架にて爾の住所^{すまい}を護り給へ。光栄は父と子と聖神^〇に帰す。

甘んじて十字架に挙げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所^{すまい}に爾の恵^{めぐみ}を垂れ給へ、爾の力を以て吾が国を樂ませ、其諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平の武器、勝たれぬ勝^{かち}を以て其助^{たすけ}とすればなり。

今も何時^{いつ}も世世に、「アミン」

威厳にして恥を得しめざる転達、至善にして讚詠せらるる生神女よ、我等の祈祷^{しりぞ}を斥^{しりぞ}けず、正教の人の住所^{すまい}を固め、吾が国を護り給へ、独^{ひとり}恩寵に満たさるる者よ、爾神を生みたればなり。

【重連禱】（通常のメロディ）

輔祭 神よ、爾の^{おおい}大なる^{あわれみ}憐^よに因りて我等を憐め、爾に祈る、聆き納れて憐めよ。

（詠） 主憐めよ。（三次）

輔祭 又吾が国の天皇、及び国を司る者の為に祈る。

（詠） 主憐めよ。（三次）

輔祭 又教会を司る我等の（府）主教（ ）の為に祈る。

（詠） 主憐めよ。（三次）

輔祭 又衆兄弟^{けいてい}及び衆「ハリストティアニン」の為に祈る。

（詠） 主憐めよ。（三次）

司祭 蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり、我等爾父と子と聖神^〇に光栄を帰す、今も何時^{いつ}も世世に。

（詠） 「アミン」

（詠） 神父よ、主の名を以て祝讚せよ。（福をくだせ）¹

司祭 光栄は一性にして生命^{いのち}を施す分れざる聖三者に帰す、今も何時^{いつ}も世世に。

（詠） 「アミン」

誦経 至高^{いと}きには光栄神に帰し、地には平安^{くだ}降り、人には恵^{めぐみ}臨めり。（三次）

主よ、我が唇^{ひら}を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。（二次）

誦経 【六段の聖詠】

第3聖詠

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が^{たましい}霊^{たましい}を指して、彼は神より救を得ずと云ふ。然れども主よ、爾は我を^{まも}衛^{まも}る盾なり、我の榮なり、爾は我が^{こうべ}首^あを擧ぐ。我が声を以て

¹ 「祝讚せよ」「福を降せ」祈祷書によって両方あるが、ここでは一般的に歌われる後者を採用した。

主に呼ぶに、主は其聖山より我に聴き給ふ。我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扨ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救ひ給へ、蓋爾は我が諸敵の頬を批ち、悪人の齒を折けり。救は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扨ぎ衛ればなり。

第 37 聖詠

主よ、爾の「憤」を以て我を責むる母れ、爾の「怒」を以て我を罰する母れ、蓋爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加はる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を圧す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰へて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が「悉」くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦ひ栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を「害」はんと欲する者は我が淪亡のことを言ひて、毎日「悪しき」謀を圖む、然れども我は「聾」の如く聴かず、啞の如く己の口を啓かず、是に於て我は聞かなく、其口に答ふる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を待む、主我が神よ、爾聴き給はん。我言へり、願くは敵は我に勝たざらん、我が足の「踏」く時、彼等は我に向ひて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の「憂」は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の為に「甚」衰む。我が敵は生きて「愈」強く、故なくして我を疾む者は「益」多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従ふに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我が救主よ、「速」に來りて我を救ひ給え。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我が救主よ、速に來りて我を救ひ給え。

第 62 聖詠

神よ、爾は我の神なり、我暁より爾を尋ぬ、我が「靈」は渴きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の「光榮」とを見ん為なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の「愛憐」は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を挙げん。我が「靈」の飽かさること「脂油」を以てするが如く、我が口「歡」の聲にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思ふ時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我「欣」ばん、我が「靈」は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が「靈」を「害」はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等「刃」に櫻りて、狐の獲物とならん。惟王は神の為に樂しまん、凡そ彼を以て誓ふ者は「譽」を得ん、蓋「謊」を言ふ者の口は塞がれんとす。夜更に爾を思ふ、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我「欣」ばん、我が「靈」は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

誦經 光榮は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」
ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya、神よ、光榮は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」

誦経 第 87 聖詠

主我が救^{すくい}の神よ、我昼夜爾の前に呼ぶ、願くは我が^{いのり} 禱^{かんばせ}は爾が^{ねがい} 顔^{かたが}の前に至らん、爾の耳を我が願^{ねがい}に傾^{かたが}けよ、蓋我が^{たましい} 霊^{いのち}は苦難に飽き、我が生命^{いのち}は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、猶殺されて^{なほ} 柩^{ひつぎ}に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如し。爾我を深^{あな}き^{くらやみ} 坎^くに、闇冥^{なご}に、淵^{ひつぎ}に置けり。爾の^い 憤^{いきどおり}は重く我に加はり、爾の波^{かたが}を傾^{かたが}けて我を撃てり。爾我が識^しる所の者を我より遠ざけ、我を彼等の^{にく} 惡^むむべき者となせり、我閉^{とぎ}されて出づるを得ず。我が目^{かなしみ}は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日爾を呼び、手を伸べて爾に向へり。爾^あ 豈^{まこと}に死せし者に奇跡^{まこと}を施さんや、死せし者^あ 豈^たに起ちて爾を讚揚せんや、爾の^{あわれみ} 憐^あは墓の中に、爾の^{まこと} 真^{くされ}は腐敗の地に^あ 豈^{つた}に傳へられんや、爾の奇跡^{くらやみ}は闇冥^{なご}に、爾の義^{わすれ}は遺忘の地に^あ 豈^しに識^しられんや。主よ、我爾に呼ぶ、我の^{いのり} 禱^{あした}は晨^{あした}に爾の前に在り。主よ、爾は何^{なん} 爲^すれぞ我が^{たましい} 霊^すを棄て、爾の^{かんばせ} 顔^せを我に隠し給ふ。我少^{わか}きより^{わざわい} 禍^{ほん}に遭ひ、^{ほん} 幾^うど消え亡せんとし、爾の^{おどし} 恐嚇^{おどし}を受けて我が^{つかれ} 疲^{つかれ}は極^{きわま}れり。爾の^い 憤^{いきどおり}は我を度^{わた}り、爾の^{おどし} 恐嚇^{おどし}は我を碎^{くだ}けり、毎日水の如くに我を環^{めぐ}り、齋^{ひと}しく集まりて我を^{かこ} 圍^{かこ}む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識^しる所の者は見えず。主我が救^{すくい}の神よ、我昼夜爾の前に呼ぶ、願くは我が^{いのり} 禱^{かんばせ}は爾が^{ねがい} 顔^{かたが}の前に至らん、爾の耳を我が願^{ねがい}に傾^{かたが}けよ。

第 102 聖詠

我が^{たましい} 霊^{たましい}よ、主を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ、我が中心^{なご}よ、其聖なる名^{ほめ}を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ。我が^{たましい} 霊^{たましい}よ、主を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ、彼が^{ことごと} 悉^{なご}くの恩^{なご}を忘る^{なご}る^{なご} 母^{なご}れ。彼は爾が^{もろもろ} 諸^{もろもろ}の不法^{ゆる}を赦^{ゆる}し、爾が^{もろもろ} 諸^{もろもろ}の疾^{やまい}を療^{いや}す、爾の^{いのち} 生命^{いのち}を墓より救^{あわれみ}ひ、^{めぐみ} 憐^{めぐみ}と^{めぐみ} 恵^{めぐみ}とを爾に^{こうむ} 冠^{こうむ}らせ、^{こうふく} 幸福^{こうふく}を爾の望^{わががえ}に飽^{わががえ}かしむ、爾が^{わががえ} 若復^{わががえ}さるること驚^{おどし}の如し。主は凡^{およ}そ迫害^{およ}せらるる者の為^{およ}に義^{およ}と審判^{およ}とを行^{およ}ふ。彼は己^{みち}の途^{みち}をモイセイに示^{みち}し、己^{しわざ}の作爲^{しわざ}をイズライリの諸子^{しわざ}に示^{しわざ}せり。主は^{こうじ} 宏慈^{こうじ}にして^{きようじゆつ} 矜恤^{かんじん}、^{こうおん} 寛忍^{こうおん}にして^{こうおん} 鴻恩^{こうおん}なり、怒^{おわり}りて終^いあり、^{いきどおり} 憤^{いきどおり}を永^いく抱^いかず。我が不法^よに因^よりて我等^よに行^よはず、我が罪^よに因^よりて我等^よに報^よいず、蓋^よ天^よの地^よより高^よきが如^よく、^か 斯^かく主^かを畏^かるる者に於^かける其^{あわれみ} 憐^{おおい}は大^{おおい}なり、東^あの西^あより遠^あきが如^あく、^か 斯^かく主^かは我が不法^かを我等^かより遠^かざけたり、父^かの其子^かを憐^かむが如^かく、^か 斯^かく主^かは彼^かを畏^かるる者を憐^かむ。蓋^か彼は我が何^かより造^かられしを知^かり、我等^かの塵^かなるを記^か念^かす。人の日^かは草^かの如^かく、其^か 榮^かゆること田^かの華^かの如^かし。風^か之^かを過^かぐれば無^かに歸^かし、其^か 有^かりし處^かも亦^か之^かを識^からず。唯^か主^かの^{あわれみ} 憐^あは彼^あを畏^あるる者に世^あより世^あに至^あり、彼の^あ 義^あは其^あ 約^あを守^あり、其^あ 誠^あを懷^あひて、之^あを行^あふ子^あ子孫^あ孫^あに及^あばん。主は其^あ 寶^あ座^あを天^あに建^あて、其^あ 國^あは萬^あ物を統^あべ治^あむ。主の^{もろもろ} 諸^{もろもろ}の天使^{ちから}、能力^{ちから}を具^{ちから}へ、其^{こえ} 声^{こえ}に^{したが} 遵^{したが}ひて其^{ことば} 言^{ことば}を行^{ことば}ふ者^{ことば}よ、主を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ。主の^{ことごと} 悉^{ことごと}くの軍^{ことごと}、其^{えきしか} 旨^{えきしか}を行^{えきしか}ふ役^{えきしか}者^{えきしか}よ、主を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ。凡^{およ}そ主の^{ことごと} 悉^{ことごと}くの造^{およ}工^{およ}よ、其^{おとこ} 一切^{おとこ}治^{おとこ}むる處^{おとこ}に於^{おとこ}て主^{おとこ}を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ。我が^{たましい} 霊^{たましい}よ、主を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ。其^{おとこ} 一切^{おとこ}治^{おとこ}むる處^{おとこ}に於^{おとこ}て、我が^{たましい} 霊^{たましい}よ、主を讚^{ほめ}め^あ 揚^あげよ。

第 142 聖詠

主よ、我が^{いのり} 禱^きを聆^きき、爾の^{しんじつ} 眞実^{しんじつ}に依^{しんじつ}りて我が願^{ねがい}に耳^{かたが}を傾^{かたが}けよ、爾の義^よに依^よりて我^よに聴^よき給^よへ。爾

の僕と^{うったえ}を為す^{なか}母れ、蓋^{およ}凡^{いのち}そ生命ある者は、一も^{いつ}爾の前に義とせられざらん。敵は我が^{たましい}霊を逐ひ、我が^{いのち}生命を地に^{ふみにじ}蹂^くり、我を久しく死せし者の如く^{くらき}暗に居らしむ、我が^{たましい}霊は私の衷に悶え、我が心は私の衷に^{うち}曠しきが如し。我^{いにしえ}古の日を想ひ、凡^{およ}そ爾の行ひしことを考へ、爾が手の^{わざ}工作を計る。我が手を伸べて爾に向ひ、我が^{たましい}霊は渴ける地の如く爾を慕ふ。主よ、^{すみやか}速に我に聴き給へ、我が^{たましい}霊は衰へたり、爾の^{かんばせ}顔を我に隠す^{なか}母れ、然^{しか}ずば我は墓に入る者の如くならん。我に^{つと}夙に爾の^{あわれみ}憐を聴かしめ給へ、我爾を頼めばなり。主よ、我に行くべき^{みち}途を示し給へ、我が^{たましい}霊を爾に挙げればなり。主よ、我を我が敵より救ひ給へ、我爾に^{はし}趨り附く。我に爾の旨を行ふを教え給へ、爾は私の神なればなり、願くは爾の善なる神^おは我を義の地に導かん。主よ、爾の名に依りて我を生かし給へ、爾の義に依りて我が^{たましい}霊を苦難より引き出し給へ、爾の^{あわれみ}憐を以て我が敵を滅し、凡^{およ}そ我が^{たましい}霊を攻むる者を^{たいら}夷げ給へ、我は爾の僕なればなり。

主よ、爾の義に依りて我に聴き給へ、爾の僕と^{うったえ}を為す^{なか}母れ。
主よ、爾の義に依りて我に聴き給へ、爾の僕と^{うったえ}を為す^{なか}母れ。
願くは爾の善なる神^おは我を義の地に導かん。

誦経 光栄は父と子と聖神^おに帰す、今も何時も世世に、「アミン」
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

[大連禱] (通常のメロディ)

輔祭 我等安和にして主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の^{すくい}救の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 此の^こ聖堂、及び信と^{つつしみ}慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 教会を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに^よ因る輔祭職、^{ことごと}悉くの^こ教衆、及び衆人の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 我が国の天皇、及び国を司る者の為に主に^こ禱らん。 (詠) 主憐めよ
 輔祭 此の^こ都邑と凡^{およ}の^{まち}都邑と地方の為に、及び信を以て此の^こ中^{うち}に居る者の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 気候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、^{うれ}艱難に^{かんなん}遭ふ者、^{とりこ}虜となりし者、及び彼等の^{すくい}救の為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 我等^{もろもろ}諸の^{うれい}憂愁と^{いかり}忿怒と^{あやうき}危難とを免るるが為に主に^こ禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}佑け救ひ^{あわれみ}憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の^こ光栄の^こ女宰・^こ生神女・^こ永貞童女マリヤと、^こ諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの}各の身^{ならび}を以て、^{ことごと}並に^こ悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリ

ストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 蓋凡そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神^{いっ}に帰す、今も何時も世に、

(詠) 「アミン」

[主は神なりとトロバリ] 三歌齋經 P942 1調

輔祭 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世にあればなり、

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第2句) 彼等我を圍み我を環れども、我主の名を以てこれを敗れり、

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第4句) 工師が棄てし所の石は屋偶の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、

(詠) ハリストス神よ、爾は己の苦の前に一般の復活を信ぜしめて、ラザリを死より起し給へり。故に我等も童子の如く勝利の徽號を執りて、爾死の勝利者に呼ぶ、至高きに「オサンナ」。主の名に因りて来る者は崇め讃めらる。(3回)

主は神なりとトロバリ 1調

主はかみなり、我等を照らせり

主の名によって来る者は 崇め讃めらる くり返す

ハリストス かみよ、爾は己の苦しみのさきに

一般の復活を 信ぜしめて ラザリを死より 起こしたまえり

故に我等も 童子のごとく 勝利のしるしを取りて

爾死の勝利者に呼ぶ いとたかきに オサンナ

主の名に由りて来る者は 崇め讃めらる

16 カフィズマ (109-117 聖詠) の誦読]

誦経 光栄は父と子と聖神^{いつ}に帰す、今も何時も世世に、「アミン」
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)
主憐めよ。(三次)

[セダレン 1 調]

~~ハリストス神、世界に生命を賜ふ主よ、爾はマルファ及びマリヤの涙を憐みて、石を墓より去らんことを命じ、死者を呼びて復活せしめ、彼に由りて復活を信ぜしめ給へり。救世主よ、光栄は爾の力に歸す、光栄は爾の權に歸す、光栄は言を以て一切を造りし主に歸す。~~
~~光栄、今も、同上。~~

[ネポロチニ]「道に沾なきもの」(118 聖詠)誦読

[トロパリ] 5 調 (主日と同じ)

(冠詞) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

救世主よ、^{かみのつかい}天 使²の軍は、爾が死者のうちに入れど、死の力を滅ぼし、^{もろびと}アダムを己と共に起こし、衆人を地獄より救い給いしを見て驚けり。



主や汝はあがめほめらる 汝の誠^{イミン}を我れに教えたまえ

きう世主や神^{カミ}の使^{ツクイ}の軍^{グン}は 汝が死者^{シンヤ}の内^{ウチ}に入れど^イ

死^{チカラ}の力^{ホロ}を亡ぼし アダムをおのれと共に起こし もろびと

を地獄^{ジゴク}よりすくいたまいしを見ておどろけり

<以下同様に歌う>

(冠詞) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

墓のうちに光る^{かみのつかい}天 使は、携香女に謂へり、女弟子よ、何ぞ香料を悲しみの涙に交ふる、墓を見て悟れよ、救世主は墓より復活せり。

(冠詞) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

携香女は朝早く泣きて、爾の墓に往きしに、^{かみのつかい}天 使その前に立ちて云へり、泣くときは過ぎたり、涙を止どめて、使徒に復活を告ぐべし。

(冠詞) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

救世主よ、携香女は香料を携え、爾の墓に來たりて泣きしに、^{かみのつかい}天 使之に謂へり

2 『連接歌集』では「てんし」

／、何ぞ生ける者を死者のうちにありと思う／、彼は神として／墓より復活せり、

光栄は父と子と聖神に帰す

父と子と聖神／、一体の聖三者を捧みて／、セラフィムともに呼ばん／、聖、聖、聖なるかな主や。

今もいつも世世に「アミン」。

(生神女讃詞) 童貞女よ／、爾は生命^{いのち}を賜う主を生みて／、アダムを罪より救い／、エヴァに悲しみに易へて喜びを賜へり／、爾より身を取りし神人は／生命を落としし者を率いて／、また復活に向かわせたり、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光栄は爾に帰す (3回)

「小連禱」

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女^{しょうしんじょ}・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の生命^{いのち}を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の国は讚揚せらる、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

〔セダレン〕5調

~~仁慈なる主よ、爾は睿知と前知との泉にして、ワイファニヤに來りて、マルファと偕にある者に問ひて云へり、友ラザリを何處に置きしか。至仁洪恩なる主よ、爾は彼の爲に涙を流して、爾の声を以て四日目の死者を復活せしめ給へり、生命を賜ふ主なればなり。~~

~~—— 光栄、今も、同上。——~~

(主日と同じ) <楽譜次ページ>

ハリストスの復活を見て／、聖なる主イイスス独り罪なき者を捧むべし／、ハリストスよ、我等爾の十字架を捧み／、爾の聖なる復活を歌い讚む／爾は我等の神なればなり／、爾のほか他の神を知らず／、唯爾の名を称う／、信者よ皆來たりて／、ハリストスの聖なる復活を捧むべし／、十字架にて歓喜は全世界にのぞめり^(臨みたればなり)／、我等恒に主を讚め揚げて／、其の復活を崇め歌はん／主は十字架に釘うたるるを忍びて／、死を以って死を滅ししに因る。

リッスのふくかつをみて聖なる主イイスス独り罪なきものを
 おがむべし、リッスや我等なんじの十字架をおがみ
 汝の聖なる復活をうたいほむ、汝は我等の神なれば
 なり、汝の外他の神を知らず、ただ汝の名をとの、
 信者やみな来たりて、リッスの聖なる復活を拝むべし
 十字架にてよろこびは全世界にのぞめり、我等つねに主を
 ほめあげてその復活をあがめうた、ね、主は十字架に
 釘うたるるをしのびて死をもって死を亡ぼせしによる

誦経 第 50 聖詠

神よ、爾の^{おおい}大なる^{あわれみ}憐に^よ因りて我を^{あわれ}憐み、爾が^{めぐみ}恵の^{おおい}多きに^よ因りて我の^け不法を^{しばしば}抹し給へ。屡我
 を我が^け不法より^{あらい}洗ひ、我を我が^け罪より^{あらい}清め給へ、蓋我は我が^け不法を知る、我の^け罪は常に我が^{まへ}前に在
 り。我は爾^{ひとり}独爾に^け罪を^か犯し、悪を爾の^{まへ}目の前に^い行へり、爾は爾の^{さん}審断に^ぎ義にして、爾の^{さい}裁判に^か公な
 り。視よ、我は^け不法に^か於て^は生まれ、我が^は母は^け罪に^か於て我を^な生めり。視よ、爾は^こ心に^{まこと}真実のあるを^あ愛
 し、我が^{うち}衷に^{ちえ}於て^あ智慧を^{あらわ}我に^{あら}顯せり。「^いイッソプ」を^そ以て^し我に^あ沃げ、然せば我^い潔く^きならん、我を
 滌^あへ、然せば我^い雪より^{しろ}白く^きならん。我に^{よろこび}喜と^{たのしみ}樂とを^き聞かせ給へ、然せば爾に^し折られし^ほ骨は^{たの}悦ば
 ん。爾の^か顔を^か我が^け罪より^か避け、我が^{ことごと}盡くの^け不法を^あ抹し給へ。神よ、^い潔き^こ心を^あ我に^あ造れ、正し
 き^{たましい}霊を^あ我の^{うち}衷に^あ改め給へ。我を爾の^か顔を^あより^お逐ふこと^{なか}母れ、爾の^{せい}聖神^をを^あ我より^あ取り^あ上ぐる^{こと}母
 れ。爾が^{すくい}救の^{よろこび}喜を^{かえ}我に^あ還せ、主宰たる^か神^をを^あ以て^あ我を^あ固め給へ。我^け不法の^あ者に^あ爾の^{みち}道を^あ教へん、
 不^ふ虔^{けん}の^あ者は^あ爾に^あ帰らんとす。神よ、我が^{すくい}救の^あ神よ、我を^あ血より^あ救ひ給へ、然せば我が^{しか}舌は^あ爾の^ぎ義

を讚め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲せば我之を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え、其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

第一のカノン、フェオファン師の作。「イルモス」と共に八句に。第八調。

第一歌頌

(イルモス) 我等其民をして紅の海を過らせし主に歌はん、彼獨巖に光榮を顯したればなり。

イルモス 第1歌頌 8調

われ等 その民をして 紅の海を通らせし 主に うたわん
 彼ひとり 巖かに 光榮を あらわし たれば なり

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

人を愛する主よ、爾は造成者及び生命の主宰として、神聖なる指塵を以て死せしラザリを復活せしめ給へり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

不死の主よ、爾は言を以て四日目の死者ラザリを喚び起して、權能を以て地獄の暗黒なる國を破り給へり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

主宰よ、爾は四日目のラザリを死より起して、衆に爾の神性の徴を示し給へり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

今日ウィファニヤはラザリの起くるを祝ひて、生を賜ふハリストスの復活を前兆す。

(イルモス) 「イズライリは乾ける地の如く」 8調

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

先に無より萬物を有と爲しし主、心の深處を知る者よ、爾は主宰として、門徒にラザリの寢を預言し給ふ。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

童貞女より人の性を取り給ひしハリストスよ、爾は人としてラザリの葬の處を問ひ、神として其何處に置かれたるを知らざることなかりき。

光榮は父と子と聖神に帰す

言よ、爾は己の復活を信ぜしめて、実に寢よりするが如く、愛せし者、已に腐りたる四日目の死者を墓より復活せしめ給へり。

今も何時も世々にアミン、

(生神女讚詞) 聘女ならぬ母よ、諸天使及び人人の會は絶えず爾を讚め揚ぐ、爾は彼等の

造成主を嬰兒として爾の手に抱きたればなり。

~~共頌、イズライリは乾ける地の如く水を過り、エギペトの禍を免れて籬べり、我が救主及び神に歌はん。~~

第三歌頌

(イルモス) 主よ、爾は爾に趨り附く者の固、爾は昧まされし者の光なり、我が神は爾を歌ふ。

第3歌頌



主よ、爾は爾に趨り附く者のかためなんじは昧まされし
者のひかりなりわが神はなんじをうたう

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

救世主よ、爾は二の行動を顯して、爾の性の二なるを示し給へり。蓋爾は神及び人なり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

智識の淵たる主、生命を賜ふ者よ、爾は死せし者を復活せしめんと欲して、其何處に置かれたるを問ひ給ふ。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

爾は處を轉ずる人としては、限らるる者と顯れ、一切を盈つる神としては、限られぬ者なり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

ハリストスよ、爾は神聖なる言を以てラザリを起し給へり、祈る、多くの罪に由りて死せし我をも起し給へ。

イルモス、「主、天の穹蒼の」。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

奇跡者主、イイスス我が神よ、爾はワィファニヤに墓の前に立ち、性の法に由りてラザリの上に涙を流して、爾が受けし肉體の真なるを信ぜしめ給へり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

救世主よ、爾は遽にマリヤ及びマルファの哀を止めて、己の權を示し給へり。蓋爾は復活なり、生命なり、爾の言ひしが如し、爾は又眞実なり、萬衆の主なり。

光榮は父と子と聖神に帰す

主よ、爾は己の全能の言を以て死の閉鎖及び國を破りて、裹布に纏かれたる愛せしラザリを暗き地獄より出し給へり。

今も何時も世々にアミン、

獨人を愛する主よ、爾は童貞女に入りて、彼より肉體を取り、宜しきに合ひて人人に見ゆる者と現れて、彼を眞の生神女及び信者の扶助者として示し給へり。

[共頌] 主、天の穹蒼の至上なる造成者、教會の建立者、冀望の極、信者の固、獨人を愛する者よ、我を爾の愛に堅め給

へ。

主 天 の 大空の至浄なる 造成 者 教会 の 建立者、希望の極み
 信者の かた-め 独人を 愛する 主よ 我を爾の愛に固めたまえ

【小連禱】

坐誦讃詞、第四調。

ラザリの姉妹は共にハリストスの前に立ち、痛く哀しみて、哭きて彼に謂へり、主よ、ラザリは死せり。彼は神として墓の處を知らざるなきに、人として問へり、何處に彼を置きしか、乃墓に就きて、四日目のラザリを呼び給ひしに、彼は遽に起ちて、復活せしめし主に伏拜せり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン、第八調、

造成主として萬事を預知する主よ、爾はワィファニヤに爾の門徒に預言して云へり、我等の友ラザリは今日寝ねたり、又知る者にして問ひて云へり、何處に彼を置きしか、且人として涙を出して、父に禱れり、遂に愛せし者を呼びて、四日目のラザリを地獄より起し給へり。故に我等爾に呼ぶ、ハリストス神よ、毅然として爾に讃美を奉る者を受けて、衆に爾の光榮を得しめ給へ。

第四歌頌

(イルモス) 主よ、我爾が攝理の秘密を聆き、爾の作爲を悟り、爾の神性を讃榮せり。

第4歌頌

主よ、我爾が攝理の秘密を聞き なんじのわざをさと
 なんじの 神性を 讃 えいせり

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

全能者よ、爾は助くる者を要するにあらずして、言ひ難き定制を行ひて、禱りて四日目の死者を起し給へり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

先に父と同永在なる言及び神と見らるる者、衆人の禱を受くる主は今人の、如く禱り給ふ。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

救世主よ、爾の声は死の悉くの力を破れり、地獄の基は爾の神聖なる力に

縁りて動きたり。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

(生神女讃詞)我等は童貞女を歌はん、蓋彼は世界を迷より救ひしハリストス神を生めり、生みて後童貞女に止まり給へり、

又、イルモス、「主よ、爾は我の固」。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

ハリストス造成主よ、爾は牧者として、已に腐りたる四日目の人を実に残忍にして飽くことを知らざる狼より出し、全能者及び主として、此を以て今爾の三日目の復活の全世界の光栄を顯し給へり。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

ハリストスよ、マルファと偕に在る者は爾生命たる主を見て呼べり、衆人の光照及び生命たる主よ、爾若し此に在りしならば、ラザリは必死せざりしならんと。死者の生命たる仁愛の主よ、爾は彼等の哀を喜に變じ給ふ。

光栄は父と子と聖神に帰す

主よ、淵は爾泉たる者を畏れ、悉くの水は爾に勤む。全能なるハリストス救世主、人を愛する主よ、爾の權能に由りて地獄の柱は震ひ、閉鎖は破れ、爾の声に由りてラザリは死より復活す。

今も何時も世々にアミン、

(生神女讃詞)聘女ならぬ聘女よ、爾は信者の譽、爾は「ハリストティアニン」等の轉達と避所、垣牆と渟泊なり。蓋爾は、純潔なる者よ、爾の子に禱を奉りて、信と愛とを以て爾を潔き生神女と承け認むる者を患難より救ひ給ふ。

[共頌]主よ、爾は我の固、我の力なり、爾は我の神、我の喜なり、爾は父の懷を離れずして、我等の貧しきに臨み給へり。故に預言者アウワクムと共に爾に呼ぶ、人を慈む主よ、光栄は爾の力に歸す。

主よ 爾は我の固め、我の力 なり なんじは 我の神、我の
歡びなり なんじは 父の懷を はなれずして われらの
貧しきに臨み たまえり ゆえに 預言者アウクム とともに 爾に
呼 - ぶ 人を慈しむ主よ、光栄は 爾の ちからに 帰す

第五歌頌

(イルモス) 「隠れざる光よ」。

第5歌頌

かくれざるひかりよ、何ぞ我を爾の顔より退けし
そとの闇は憐れなる われを覆えり いのる我を返して
我が途を爾の戒めの光に向かわしめたまえ

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

人を愛する主よ、爾は衆人の不死なる生命として、ラザリの墓の前に立ちて、彼を呼びて生命を與へ、神として、此を以て明に將來の復活を預象し給へり。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

布にて足の纏かれたるラザリは歩みたり、此れ奇跡の中の奇跡なり、蓋妨ぐる者より更に大なる固むる者は現れたり、即ハリストスなり、其言に萬有は服従して、彼を神及び主宰として勤む。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

四日目の死者腐りたるラザリを起ししハリストスよ、我今諸罪に縁りて死し、坎と死の暗き蔭とに置かれたる者を起して、慈憐の主なるに因りて、我を援けて救ひ給へ。

又、イルモス、同上、

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

恒忍なる主よ、爾は父に光栄を歸して、禱りて、環り立てる民に己が神に逆ふ者にあらざるを信ぜしめ、感謝を爾の父に捧げて、命を以てラザリを起し給ふ。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

嗚呼爾が神たる声、爾の權の神聖なる力や、救世主よ、爾は此を以て飽くことを知らざる死の地獄の門を壊ち給へり。求む、先に四日目の爾の友ラザリを死より出しし如く、我を吾が諸慾より出し給へ。

光栄は父と子と聖神に帰す

人を愛する主よ、ラザリと、マルファと、マリヤとの祈禱に由りて、我等に爾の十字架と苦、及び輝ける諸日の女王たる爾の復活の日を見る者と爲るを得しめ給へ。

今も何時も世々にアミン、

(生神女讚詞) 至浄なる者よ、祈る、爾の子の前に母の勇敢を有ちて、我等の爲に親族の慮を爲すを止むる勿れ、蓋我等「ハリストティアニン」は獨爾を主宰の前に嘉く納れらるる轉達者として進む。

[共頌] 隠れざる光よ、何ぞ我を爾の顔より退けし、外の闇は憐なる我を掩へり。祈る、我を返して、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。(同上)

是より四歌頌を始む、コスマ師の作。イルモスに次、讃詞四句に。

第六歌頌

(イルモス)、主よ、爾は獨イオナを鯨の内に入れたり、我敵の網に捕はれたる者を、彼を淪滅より救ひし如く救ひ給へ。

第6歌頌

主よ 爾は ^{ひと}獨り イオナを ^{くじら}鯨の中に入れたり
われ 敵の網に ^{あみ}捕らわれたるものを かれをほろびより
救いしが ^{ごとく}如くすくいたまえ

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

主よ、愛は爾をウィファニヤにラザリに導きたるに、爾は神として、彼已に臭くなりたる者を復活せしめて、地獄の桎梏より救ひ給へり。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

マルファはラザリの四日目なるを見て、彼の爲に望を失ひたれども、ハリストスは神として、言を以て腐りたる者を復活せしめて、生命に移し給へり。

又、修士イオアンの作。同調。

イルモス、「救世主よ、我を浄め給へ」。

光榮は父と子と聖神に帰す

主宰よ、爾は眞の神にして、ラザリの寢を知り、之を爾の門徒に知らせて、爾の神性の限なき行動を信ぜしめ給へり。

今も何時も世々にアミン、

限られぬ主宰よ、爾は身に限られてウィファニヤに來り、人としてラザリの上に涙を流し、神として望みて四日目の者を復活せしめ給ふ。

[共頌] 救世主よ、我を浄め給へ、我が不法多ければなり、祈る、我を惡の淵より引き上げ給へ、我爾に呼びたればなり、吾が救の神よ、我に聽き給へ。

救 - 世主よ、我を浄めたま - え わが不法 多ければ なり
 いのる 我を悪の淵より 引き上げたま - え われ爾に 呼び
 たれば な - り 我が救いの かみよ、われに聴きたまえ

【小連禱】

小讃詞、第二調。

ハリストス、衆人の歡喜、眞実、光、生命、及び世界の復活なる主は己の仁慈に因りて地上の者に現れ、復活の模と爲りて、衆に神聖なる赦を賜ふ。

同讃詞

萬有の造成主よ、爾は門徒に知らせて云へり、兄弟及び知己よ、我等の友は寝れりと、斯く告げて爾は萬有の造成主として、知らざる所なきを教へ給へり。又云へり、然らば往きて、奇異なる葬と、マリヤの哀と、ラザリの墓とを見ん、蓋我彼處に奇跡を行はんと欲す、此を以て十字架の端緒を爲して、衆に神聖なる赦を賜はん。

第七歌頌

(イルモス) エウレイの少者は爐に在りて勇ましく燄を踏み、火を露に變じて籲べり、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

第7歌頌

エウレイの少者はいろりにありて ^{いさ}勇ましく ^{ほのほ}燄を踏み
 火を露に變じてよべり 主かみよ、爾は世々に
 あがめ 讃めらる

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

仁慈なる主よ、爾は人として涙を流し、神として墓の中に在る者を復活せしめ給へり。

ラザリは地獄より釋かれて呼べり、主神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

ラザリは主宰の言に由りて地獄の淵と黒暗とを脱れ、裏布に纏かれて出でて呼べり、主神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

又、イルモス、「昔ワフィロンに於て」。

冠詞：主よ、光榮は爾の聖なる復活に帰す

仁慈なる主よ、爾は友の上に涙を流して、マルファの涙を止め、自由なる苦を以て爾の民の面より凡の涙を拭ひ給へり。我等の先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

光榮は父と子と聖神に帰す

生命の寶蔵たる救世主よ、爾は言を以て地獄の腹を刳きて、死者を寢よりするが如く起し、之を復活せしめて歌はしめ給へり、我等の先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

今も何時も世々にアミン、

主宰よ、爾は臭き死者、裏布に縛られたる者を起し給へり。求む、諸罪の縲綆に縛られたる我をも起し給へ、蓋我歌ふ、我等の先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

[共頌] 昔ワフィロンに於てイウデヤより來りし少者は、聖三の信を以て、爐の燄を踏みて歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

昔 バビロンにおいてイウデヤより 來たりし少者は
 聖三の信 を以て いろりの ほのほを踏みて うたえり
 先祖の神よ、爾は あがめ 讃めらる

第八歌頌

(イルモス) 樂器は鳴らされ、無數の人はデイルの像に伏拜するに、三人の少者は順はずして、主を歌ひて、萬世に讃榮せり。

第8歌頌
 樂器は鳴らされ 無數の人はデイルの像に伏^{ふく}拜^{はい}するに
 三たりの少者は したがわずして 主をうたいて



冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

爾は牧者の如く羔を尋ね、無慙の残害者たる狼より奪ひて、朽ちたる者を新にして、爾に歌はしめ給へり、主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

爾は人として墓を尋ね、造成主として地獄を懼れしめし爾の主宰たる命を以て死者を復活せしめて、爾に呼ばしめ給へり、主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

又、イルモス、「天使の軍の歌ふ所」。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

爾は人として問ひ、神として言を以て四日目の死者を復活せしめ給ふ。故に我等は爾を歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん。

主宰よ、マリヤは敬みて宜しきに合ひて爾に香膏を捧げて、爾を萬世に讃め歌ふ。

今も何時も世々にアミン、

ハリストスよ、爾は人として父を呼び、神としてラザリを起し給ふ。故に我等爾を世世に讃め歌ふ。

我等主を讃め、崇め、伏し拜みて、世世に歌ひ讃めん。

[共頌] 天使の軍の歌ふ所の天の王を崇めて、萬世に讃め揚げよ。



※「ヘルウィムより尊く」を誦句せず。

第九歌頌

(イルモス) 人人よ、至浄なる生神女を嚴に尊まん、我等歌を以て神性の火を焚かるるなく腹に受け給ひし者を崇め讃む。

第9歌頌

ひとびとよ 至浄なる生神女を 厳かに 尊とまん 我等 歌を
 以て 神性の火を 焚かるるなく 腹に受けし者を あがめ 讃む

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

人人は四日目の死者の歩むを見て、奇跡に驚きて、贖罪主に呼べり、我等歌を以て爾神を崇め讃む。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

嗚呼我が救世主よ、爾は己の光栄なる復活を預信せしめて、四日目の死者ラザリを地獄より解き給ふ、故に彼は歌を以て爾を崇め讃む。

又、イルモス、「潔き童貞女よ、我等爾に依りて」。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

ハリストスよ、爾は己の父を尊みて、神に逆ふことなきを示し、禱を奉りて、己の權を以て四日目の死者を起し給へり。

冠詞：主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す

ハリストスよ、爾は四日目のラザリを墓より起して、衆に爾の三日目の復活の至りて確実なる證者を示し給ふ。

光栄は父と子と聖神に帰す

我が救世主よ、爾は己の人たる行動を示して、歩み、泣き、語り、神たる行動を顯して、ラザリを起し給ふ。

今も何時も世々にアミン、

主宰我が救世主よ、爾は己の二性に適ひて、言ひ難く爾の權能の旨を以て我が救を爲し給へり。

[共頌] 潔き童貞女よ、我等爾に依りて救はれし者は爾を實に生神女と承け認めて、無形の軍と偕に爾を崇め讃む。

いさぎよき童貞女よ、われら 爾に依りて救われしものは
 なんじを實に生神女とけみとむ 無形の軍と偕に あがめ 讃む

【小連禱】

次に第一調に依りて、

主我等の神は聖なり。三次。歌う

差遣詞、自調、二次

神の言よ、爾の言に由りてラザリは今躍り出でて、復生命の途を行く、人人は枝を執りて、爾權能者を尊む、蓋爾は己の死を以て全く地獄を滅さん。

又、光栄、今も、一次。

死よ、ハリストスはラザリを以て已に爾を破る、地獄よ、爾の勝は安にか在る、ウィファニヤの歎は今爾に轉ず、我等皆勝利の枝を以て主に捧げん。

【「凡そ呼吸ある者」とスティヒラ】 1 調

凡そ呼吸ある者は主を讚め揚げよ。 / (第 148 聖詠)

天より主を讚め揚げよ、 / 至高きに彼を讚め揚げよ。 / 讚め歌は爾、神に帰す。

其の悉くの神使(天使)よ、彼を讚め揚げよ、 / 其の悉くの軍よ、彼を讚め揚げよ。 / 讚め歌は爾神に帰す。

およそ いきあるものは主をほめあげよ 天より主
をほめあげよいとたかきにかれをほめあげよ
ほめ歌は汝かみにきすそのことごとくの神使や
かれをほめあげよそのことごとくの軍ゲンやかれをほめあ
げよほめ歌は汝かみに帰キす

日と月よ、彼を讚め揚げよ、悉くの光る星よ、彼を讚め揚げよ。諸天の天と天より上なる水よ、彼を讚め揚げよ。主の名を讚め揚ぐべし、蓋彼言いたれば、即成り、命じたれば、即造られたり、彼は之を立てて世々に至らしめ、則を与えて之を躡えざらしめん。地より主を讚め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と霰、雪と霧、主の言葉に従う暴風、山と悉くの陵、果物の樹と悉くの栢香木、野獸と諸々の家畜、匍う物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名を讚め揚ぐべし、蓋惟其の名は高く挙げられ、其の光栄は天地に遍し。彼は其の民の角を高くし、其

の諸聖人、イスライリの諸子、彼に親しき民の栄えを高くせり。

第 149 聖詠

新たなる歌を主に歌え、其の讚美は聖者の會に在り。イスライリは己の造成主の為に楽しむべし、シオンの諸子は己の王の為に喜ぶべし。舞を以て彼の名を讚め揚げ、鼓と琴とを以て彼に歌うべし、蓋主は其の民を恵み、救いを以て謙卑の者を栄えしむ。諸聖人は光榮に在りて祝い、其の榻に在りて歡ぶべし。其の口には神の讚榮あり、其の手には諸刃の劍あるべし、仇を諸民に報い、罰を諸族に行い、其の諸王を索にて縛り、其の諸侯を鐵の鎖にて繋ぎ、

(句) 彼等の為に記されし審判を行はん為なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

人人の復活及び生命たるハリストス、恒忍なる主よ、爾はラザリの墓の前に立ちて、我等に己が二性なること、即神にして又潔き童貞女より人として來りしを信ぜしめ給へり。蓋人として、何處に葬られたるを問ひ、神として、生命を施す指塵を以て四日目の死者を復活せしめ給へり。

(句) 神を其聖所に讚め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讚め揚げよ。

ハリストスよ、爾は四日目の死者ラザリを地獄より復活せしめて、己の死の前に死の權を戦かせ、獨の愛する者を以て衆人の滅亡より救はるるを預象し給へり。故に我等爾の全能の權に伏拜して呼ぶ、救世主よ、爾は崇め讚めらる、我等を憐み給へ。

(句) 其權能に依りて彼を讚め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讚め揚げよ。

マルファ及びマリヤは救世主に言へり、主よ、爾若し此に在りしならば、ラザリは死せざりしならんと、然れども寢りし者の復活たるハリストスは、彼已に四日目になりしを死より復活せしめ給へり。衆信者よ、來りて、我等の靈を救はん爲に光榮の中に臨む者に伏拜せん。

(句) 角の声を以て彼を讚め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讚め揚げよ。

ハリストスよ、爾は己の神性の徴を爾の門徒に示したれども、民の中には己を卑くして、之を隠さんと欲せり。故に預知する神として使徒にラザリの死を預言したれども、ウィファニヤに人人の中に在りて、爾の友の墓を知らざることなきに、人として其何處に在るを問へり、然れども爾に因りて復活したる四日目の者は爾の神たる權を顯せり。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

(句) 鼓と舞とを以て彼を讚め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讚め揚げよ。

第四調、ハリストスよ、爾は四日目の死者たる爾の友を起し、マルファとマリヤとの哀を慰めて、衆に爾が己の權能の旨に由りて神たる力を以て一切を行ふことを示し給へり。ヘルウィム等は絶えず爾に呼ぶ、至高きに「オサンナ」、萬有の上に在る神は崇め讚めらる、光榮は爾に歸す。

(句) 和声のばつを以て彼を讚め揚げよ、大声のばつを以て彼を讚め揚げよ、凡そ呼吸ある者は主を讚め揚げよ。

マルファはマリヤに呼べり、師は至りて爾を呼ぶ、來れ。彼は亟にイイススの立てる處に來りて、彼を見て呼び、俯伏して、彼の至淨なる足に接吻して云へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりしならん。

(句) 主我が神よ、起きて爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

主よ、爾はウィファニヤに於て死せしラザリ、四日目の死者たるを起し給へり。蓋唯其墓に就きたるに、爾の聲は死者の爲に生命と爲り、地獄は歎息して畏を以て彼を放てり。大なる奇跡や、大仁慈なる主よ、光榮は爾に歸す。

(句)主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇蹟を伝へん。

主よ、爾はマルファに我は復活なりと言ひし如く、行を以て言を成就して、ラザリを地獄より呼び起し給へり。人を愛する主よ、祈る、慾に由りて死者となりし我をも、仁慈なる主として、復活せしめ給へ。

光栄は父と子と聖神に帰す、(第二調)

今日至大至栄なる奇跡は行はれたり、蓋ハリストスは友と名づけたる四日目の死者を呼びて、墓より起し給へり。我等は彼を至栄なる主として讃栄す、願はくは彼は義なるラザリの祈禱に由りて我等の靈を救はん。』

今も何時も世世に「アミン」

【生神女讃詞】 2 調

生神童貞女や、／爾は至りて讃美たる者なり、／爾に身を取りし主は／地獄を虜にし、アダムを呼び起こし、詛いを破り／エヴァを釈し死を亡ぼし／我等を生かせり、／故に我等歌うて呼ぶ、／此く行い給いしハリストス神は崇め讃めらる、／光栄は爾に帰す。

Handwritten musical score in G major (one flat) and 4/4 time. The lyrics are written in Japanese with some Latin characters in parentheses. The score consists of seven staves of music with lyrics underneath.

光栄は父と子と聖神に帰す今も いつも世世 にアミン
生神女讃詞

生神童_{シヨウ シン ドウ}てい女や汝は至_イって讃美_{サンビ}たるものなりな_ンじ

に身を取りし主は地獄をとりこにしアダムを呼び起_{オコ}し

のろいをやぶ_ルりエワをゆるし死を亡_ホぼし

われらをいかせり故_{ユエ}にわれら歌_{ウタ}うてよ ぶ_フかく行_イい

給_{タマ}いしリス_ス神はあがめほめらる光えいはな_ンじ

に帰_キす

【大詠頌】司祭 光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す、

♪ 至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵み臨めり。)

至とたかきに 光栄 かみ 神に 帰し、
地には 平安く だり 人には 恵み の 臨ぞ めり

1. 主 天の王、神・父 全能者よ、主 ^{どくせい}独生の子イイスス・ハリストス、及び ^{せいしん}聖神よ、

主 天の王、神・父 全能者よ 主独生の子イイスス・ハリストス、及び 聖神よ、

<以下同様に A B 繰り返して歌う>

2. 爾の大なる光栄に **因りて**、我等 爾を崇め、爾を **讃め揚げ**、
爾を伏し拜み、爾を尊み **うたひ**、爾に **感謝す**。
3. 主 神よ、神の ^{こひつじ}羔、父の子、世の罪を任ひし **者よ**、我等を **憐みたまへ**、
世の ^{もろもろ}諸の罪を任ひし **者よ**、我等の ^{いの}祈りを **納れたまへ**。
4. 父の右に坐する **者よ**、我等を **憐みたまへ**。
5. 爾は独り **聖なり**、爾は独り主イイスス・ハリストス、神・父の光栄を **顕す者なればなり、「アミン」**
6. 我 日々に 爾を **讃め揚げ**、爾の名を 世々に **崇め歌はん**。
7. 主よ、我を **守り** 罪なくして この日を ^{わた}度らせたまへ、。
8. 主 吾が先祖の **神よ**、爾は **崇め讃められ** 爾の名は 世々に **尊み歌わる「アミン」**。
9. 主よ、爾を ^{たの}恃むに **因って**、爾の **憐みを** 我等に **垂れたまへ**、。
10. 主よ、爾は **崇め讃めらる**、爾の ^{いまし}誠めを我に ^{おし}訓へたまへ、。(3次)
11. 主よ、爾は **世世** 我等の ^{かくれが} **避所たり**。

12. 我曾て **言へり**、主よ、我をあわれみ、
 我が ^{たましい} 霊を ^{いや} 醫し **給へ**、我 罪を 爾に 得たればなり。
13. 主よ、爾に **趨り附く**、爾の旨を行ふを 我に教へたまへ、
14. 爾は我の **神**、生命の源は 爾に在ればなり、
 我等 爾の光に **於いて** 光を觀ん。
15. 憐みを 爾を知る **者に** 恒に 垂れたまへ。

【聖なる仲】

聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、
 我等を ^{あわ} 憐れめよ、 (3回繰り返す)
 光 栄は 父と子と 聖神に 帰す 今も何時も 世世にアミン
 聖なる常生 のものよ、我等を ^{あわ} 憐れめよ、
 聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、
 我等を ^{あわ} 憐れめよ、

(スラブ語)
 スヴィヤティイ ボジェ スヴィヤティイ クレプ キー スヴィヤティイベス メールトゥヌイ ポ ミ ルイ ナース

[トロパリ 1 調]

ハリストス神よ、爾は己の苦の前に一般の復活を信ぜしめて、ラザリを死より起し給へり。故に我等も童子の如く勝利の徽號を執りて、爾死の勝利者に呼ぶ、至高きに「オサンナ」。主の名に因りて来る者は崇め讃めらる。

ハリストス かみよ、 爾は己の 苦しみのさきに
 一般の復活を 信ぜしめて ラザリを死より 起こしたまえり
 故に我等も 童子のごとく 勝利のしるしを取りて
 爾 死の 勝利者に呼ぶ いとたかきに オサンナ
 主の名に由りて来る者は 崇め讃め らる

【重連禱】

- 輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、
 (詠) 主憐めよ、(3次)
- 輔祭 又我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、
 輔祭 又教会を司る我等の主教(某)、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る、
 輔祭 又ハリストスを愛する悉くの皇軍の為に禱る、
 輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸
 方とに葬られたる正教の者の為に禱る、
 輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦
 を賜はんが為に禱る、
 輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の
 大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、
 司祭 (高声) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も
 何時も世々に、
 (詠) 「アミン」

【増連禱】

- 輔祭 我等主の前に吾が朝の禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ
 輔祭 平安の神使正しき教導師、吾が霊体の守護者を賜はんことを主に求む
 輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、
 輔祭 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む
 輔祭 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む

- 輔祭 我等の生命の終が「ハリスティアニン」に適ひ、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき対をなすを賜はんことを求む
- 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女まりやと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主爾に
- 司祭 (高声) 蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」
- 司祭 衆人に平安、
(詠) 爾の神にも
- 輔祭 我等の首を主に屈めん、
(詠) 主爾に
- 司祭 (祝文を黙誦)、聖なる主、高きに居り卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を鑑る者や、我等心と体との項(くび)を爾の前に屈めて爾に禱る、爾が見えざる手を爾が聖なる住所より伸べて、我等衆人に福を降し給へ、我等に自由或は自由ならずして犯し罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦して、我等に今世来世の諸善を與へ給へ、
(高声) 蓋我が神や、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」
- 輔祭 睿智
(詠) 福を降せ
- 司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に
(詠) 「アミン」神や、我が国の天皇と、正教会の教と、正教のすべての「ハリスティアニン」等を永く守り給へ、
- 司祭 至聖なる生神女や、我等を救ひ給へ、
(詠) ヘルビムより尊くセラフィムに並びなく栄え、貞操をやぶらずして神言を生みし実の生神女たる爾を崇め讃む、
- 司祭 ハリストス神我等の恃や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、
(詠) 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に「アミン」、主憐めよ(3次)福を降せ、
- 司祭 (発放詞) 死より復活せしハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、光栄にして讚美たる聖使徒聖某(本日聖人の名を挙ぐ)及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり、

「アミン」

【萬寿詞】

**神よ、我が国の天皇を、及び国を司る者、
我等の(府)主教
及び正教のハリスティアニン等を 幾とせにも護り給え。**

~~~~~

# ラザリのスボタ 聖体礼儀

【トロパリ 1 調】



ハリストス かみよ、爾は己の 苦しみのさきに  
一般の復活を 信ぜしめて ラザリを死より 起こしたまえり  
故に我等も 童子のごとく 勝利のしるしを取りて  
爾 死の 勝利者に 呼ぶ いとたかきに オサンナ  
主の名に由りて来る者は 崇め讃め らる

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

【コンダク 2 調】



ハリストス 衆人のよろこび 真実、 ひかり  
生命、及び世界の復活なる 主は 己の 仁慈によりて  
地上の者に あらわれ 復活の模となりて  
衆に神聖なる 赦しを たまう

聖三詞（聖なる神）に代へて「ハリストスに於て洗を受けし者はハリストスを衣たり、アレルイヤ」

ハリストスに 依<sup>よ</sup>って 洗<sup>せん</sup>を受けしもの

ハリストスを 衣<sup>き</sup>たーり アレルイヤ

3回繰り返す

光栄は父と子と聖神に帰す、いまも何時も 世世に アミン。

ハリストスを 衣<sup>き</sup>たり、アレルイヤ。

ハリストスに依って洗を受けし者、(もう一度)

提綱、第三調、

主は我が光、我が救なり、我誰をか恐れん。

句、主は我が生命の防固なり、我誰をか懼れん。

ポロキメン 3調

主は我が光、我が救いなり われ誰<sup>た</sup>れをか おそれん

【使徒経】エウレイ書三百三十三端の半(12:28-13:8)より、  
 兄弟よ、我等は震ふべからざる國を受けて、恩寵を保ち、之に由りて、敬虔と寅畏とを懐きて、神の悦ぶ所の如く奉事すべし。蓋我等の神は燬き盡す火なり。兄弟の愛爾等の中に存すべし。遠人を善く待ふことを忘るゝ勿れ、蓋或者は之に由りて、知らずして天使等を待へり。囚者を念ふこと、爾等も彼等と偕に囚はれしが如くせよ、苦しむ者を念へ、爾等も亦身に居るが故なり。婚姻は衆の中に貴くして、牀は穢なかるべし、邪淫の者姦淫の者は、神之を審判す。貪婪に習ふ勿れ、有つ所を以て足れりとせよ、蓋彼自ら云へり、我爾を棄てず、爾を遺さざらんと。故に我等毅然として曰ふ、主は我を助くる者なり、我懼れざらん人何をか我に為さんと。爾等の教導師、神の言を爾等に傳へし者を記念せよ、彼等の生命の終を鑑みて、彼等の信に倣へ。イイススハリストスは昨日、今日、及び世世に変らざる者なり。

## 【ア ril イヤ】 第五調、



句、主は王たり、彼は威厳を衣たり。句、故に世界は堅固にして動かざらん。

## 福音経 イオアン三十九端(11:1-45)

彼の時病める者あり、ラザリと云ふ、ウィファニヤ、即マリヤ及び其姉妹マルファの村の人なり。マリヤは即香膏を主に膏り、髪を以て其足を拭ひし者にして、病めるラザリは彼の兄弟なり。姉妹はイイススに人を遣して曰へり、主よ爾の愛する者は病めり。イイスス之を聞きて曰へり、此の病は死を致さず、乃神の光榮を致さん、神の子が之に由りて榮せられん為なり。イイススはマルファ及び其姉妹とラザリとを愛せり。既に彼病めりと聞きて、仍其在りし處に留れること二日なり。其後門徒に謂ふ、我等復イウデヤに往かん。門徒彼に謂ふ、夫子、イウデヤ人近ごろ石を以て爾を撃たんと謀れり、爾復彼處に往くか。イイスス答へて曰へり、一日には十二時あるに非ずや、人若し昼に行かば蹶かず、此の世の光を見るに困りてなり。人若し夜に行かば、蹶く、彼に光なきに困りてなり。此を言ひし後、彼等に謂ふ、我等の友ラザリ寝ねたり、然れども我往きて彼を醒ますん。門徒曰へり、主よ彼若し寝ねたらば、愈えん。イイスス彼の死の事を言ひしに、彼等は其寝ねて臥める事を言ふと意へり。其時イイスス明に彼等に謂へり、ラザリは死せり。而して我は我か彼處に在らざりしを、爾等の為に喜ぶ、爾等を信ぜしめん為なり、然れども彼に往かん。フォマ又ディディムと名づくる者、同門徒に謂へり、我等も往きて、彼と偕に死なん。イイスス来りて、ラザリの已に墓に葬られて、四日なるに遇へり。ウィファニヤはイエルサリムに近し、相去ること約十五小里なり。イウデヤ人多くマルファ及びマリヤに来れり、其兄弟の事に縁りて彼等を慰めん為なり。マルファはイイススの来るを聞きて、往きて、彼を迎へたり、マリヤは仍家に坐せり。マルファはイイススに謂へり、主よ、爾若し此に在りしならば我が兄弟は死せざりしならん。然れども我知る、今も爾が凡そ神に求めん者は、神爾に賜はん。イイスス之に謂ふ、爾の兄弟は復活せん。マルファ曰く、我は末の日の復活の時に彼が復活せんことを知る。イイスス之に謂へり、我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死すと雖生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、世世に死せざらん。爾此を信ずるか。曰く、主よ、然り、我は爾が世に来るべきハリストス、神の子たるを信ぜり。之を言ひて後、往きて潜に其姉妹マリヤを呼びて曰へり、師来りて爾を呼ぶ。マリヤ此を聞き、亟に起ちて、彼に往けり。時にイイスス未だ村に入らずして、仍マルファが彼を迎へし所に在り。マリヤと偕に家に在りて、之を慰めしイウデヤ人は、其亟に起ちて出でしを見て、之に随へり、曰ふ、彼は墓に往きて、彼處に哭かんと。マリヤはイイススの在りし所に来り、彼を見て其足下に俯伏して曰へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりしならん。イイスス彼が哭き、又彼と偕に来りしイウデヤ人の哭くを見て、心に哀みて自ら惻めり、曰く、爾等何處に彼を置きしか。彼に謂ふ、

主よ来りて觀よ。イイスス泣けり。イウデヤ人曰へり、觀よ、其彼を愛せしこと如何ばかりぞ。其中の或者曰へり、瞽者の目を啓きたる此の人は、彼をも死せざらしむる能はざりしか。イイスス復衷に哀みて、墓に来る。是れ洞にして、其上に石を置けるあり。イイスス曰く、石を去れ。死者の姉妹マルファ彼に謂ふ、主よ、已に臭し、蓋彼死して四日なり。イイスス之に謂ふ、我爾に、若し信ぜば、神の光栄を見んと、云ひしに非ずや。是に於て彼等石を死者の置きたる所より去れり。イイスス目を上に挙げて曰へり、父よ、爾が我に聴きしを、我爾に感謝す。我は爾が恒に我に聴くを知れり、然れども環り立てる民の為に之を言へり、彼等の爾が我を遺し、ことを信ぜん為なり。之を言ひて、大なる聲を以て呼べり、ラザリよ外に出でよ。死せし者出でたり、手足は布に纏かれ、面は巾に裏まれたり。イイスス彼等に謂ふ、之を積きて、行かしめよ。其時マリヤに來りてイイススの行ひし事を見たるイウデヤ人の中の多くの者彼を信ぜり。其中の或者曰へり、瞽者の目を啓きたる此の人は、彼をも死せざらしむる能はざりしか。イイスス復衷に哀みて、墓に来る。是れ洞にして、其上に石を置けるあり。イイスス曰く、石を去れ。死者の姉妹マルファ彼に謂ふ、主よ、已に臭し、蓋彼死して四日なり。イイスス之に謂ふ、我爾に、若し信ぜば、神の光栄を見んと、云ひしに非ずや。是に於て彼等石を死者の置きたる所より去れり。イイスス目を上に挙げて曰へり、父よ、爾が我に聴きしを、我爾に感謝す。我は爾が恒に我に聴くを知れり、然れども環り立てる民の為に之を言へり、彼等の爾が我を遺し、ことを信ぜん為なり。之を言ひて、大なる聲を以て呼べり、ラザリよ外に出でよ。死せし者出でたり、手足は布に纏かれ、面は巾に裏まれたり。イイスス彼等に謂ふ、之を積きて、行かしめよ。其時マリヤに來りてイイススの行ひし事を見たるイウデヤ人の中の多くの者彼を信ぜり。

あとは、通常の金ロイオアンの聖体礼儀と同じ

[領聖詞] 爾は嬰兒と哺乳者との口より讚美を備へたり (第8聖詠3から)

なん じは おさな ごと 乳 の み 子 の  
く ち よ り 讚 美 を そ な え た り  
ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ